

2009年三番瀬干潟生物調査から

多留 聖典（東邦大学理学部東京湾生態系研究センター/DIV）

市民参加型干潟生物調査の効率・精度向上を検討

- 身近な環境の生物多様性の社会的認識の向上意義：
- 生物相の長期的な基礎的情報の蓄積と変化の検知

Methods

- 調査範囲：一人あたり約50m四方
- 生物記録：確認した底生動物の出現を確認・記録
 - 表在生物：底質の表層、転石や漂着物の下
 - 埋在生物：小型スコップで掘り返しを15回
- 棲痕：巣穴・棲管・糞塊・殻などの生活痕跡



Results and Discussions

26人の参加を得て、40分類群の生物を記録した。

出現種	発見人數	発見率
ユビナガホンヤドカリ	24	0.92
ショオフキ	19	0.73
タマミキゴカイ	18	0.69
アラシシロ	13	0.50
アサリ	12	0.46
マメコブシサンギニ	11	0.42
ボンイトゴカイ	8	0.31
ヒガタチラリ	6	0.23
ホビヒノスガイ	6	0.23
ツツオオフェリア	4	0.15
タカノケフサインギニ	4	0.15
タナイス類	4	0.15
ホリセモムシ	4	0.15
クマドリゴカイ	4	0.15
シノブハネエラスピオ	4	0.15
イシワケイソギンチャク	3	0.12
チロリ	3	0.12
ドロオニスピオ	3	0.12
バカガイ	3	0.12
ニンクンスナモグリ	3	0.12
ラスベラムメガニ	3	0.12
ケフサインギニ	3	0.12
ココエビ類	2	0.08
マガキ	2	0.08
マテガイ	2	0.08
コメツキガニ	2	0.08
ミナミシロガネゴカイ	2	0.08
イワムシ	2	0.08
ウスヒラムシ	1	0.04
ホソウミニナ	1	0.04
オキシジミ	1	0.04
スジエビ類	1	0.04
オサガニ	1	0.04
ウスカラシオツヅガイ	1	0.04
ハナオカガキゴカイ	1	0.04
ウミイサゴムシ	1	0.04
タマキビ	1	0.04
クレヒガイ	1	0.04
イソガニ	1	0.04
ヨコエビの一種	1	0.04

出現種（発見率順）

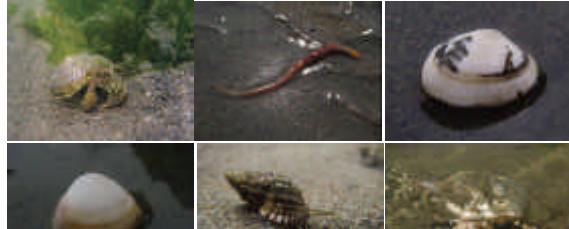
1/3以上の参加者が出現を記録した種

共通性の高い特性

- 密度が高い
- 動きが大きい
- 比較的大型
- 表面が堅く形態が一定
- 埋在でも掘れば見える

参加者が発見しやすく、かつ認識しやすい特性を備えている種が多い

移動性が高い、または高密度な、いわゆる「普通種」が多くなる可能性が高い



1名の参加者のみが出現を記録した種

共通性の高い特性

- 密度が低い
- 動きが緩慢か不動
- 比較的小型
- 体が柔軟で形態が特異
- 表在でも間隙に潜む

参加者が発見しにくい、もしくは認識しにくい特性を備えている種が多い

移動性が低い、または低密度で、希少性・特異性の高い種が多い可能性が高い

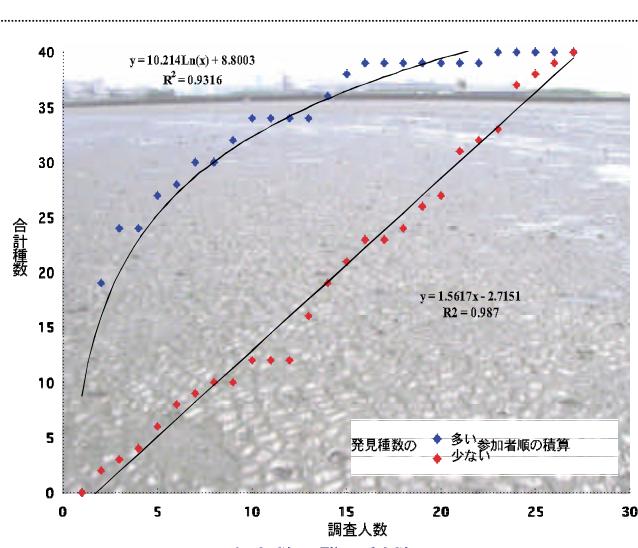


これらの生物を認識する工夫が必要

- 生物の形をイメージしておく
- 生物が過ごしやすい環境を想像する
- 生物の痕跡を発見し、辿る
- 同所的に出現する生物を推定する



参加者の参加・学習意欲向上の成果が反映される



発見種数の多い参加者順に積算：対数曲線近似の増加

(始めの数人で大部分の出現種を記録)

発見種数の少ない参加者順に積算：直線近似の増加

(一人増加ごとに一定数、出現種が増加)

参加人数・習熟度により成果が大きく変わる

- 事前学習などを行い探索能力を上げる
- 充実した使いやすい資料を作成する
- 市民の参加・探索意欲を向上する
- 優秀な指導者を確保する
- 現地の安全・快適性を確保し参加を容易にする

主催者の教育・指導能力・社会支援が反映される

Conclusion

市民参加型の干潟生物調査で効率よく有効な結果を得るには

- 参加人数の確保
- 参加者の知識レベル向上
- 参加者の探索意欲向上
- 参加者の分析能力の向上

が不可欠
そのためには

- 魅力的なプログラムの提案
- 効率的な学習資料の開発
- 現地の安全・快適性の確保
- 優良な指導者の確保と育成

が重要

資料面の要求性

- 対象地域に即した“Compact”性
- 形態・生態情報を併用した同定法
- 生息環境と着目点を明示した探索法
- 同所的に出現する生物種の推定

人材・社会面の要求性

- 対象地域の生物生態情報の収集と確認
- 分類学的情報の収集と認識能力の向上
- 研究者への情報提供による「相利共生」
- 安全管理・快適性確保へのバックアップ